



シンポジウムに合わせて石井氏ゆかりの昆虫標本等の展示も行われた

ネイチャーポジティブ社会実現へ おおさか環農水研 シンポジウム

(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所は3月26日、昨年12月に急逝した石井実理事長のもとで推進してきた重点テーマのひとつ「ネイチャーポジティブ社会の実現に向けた取組」について、成果や今後の方向性を共有するため、

シンポジウム「ネイチャーポジティブ社会の実現に向けて」を石井実理事長と歩んだ6年を「開催。大阪府、関連団体、事業者(企業)など218人が出席した。」

はじめに、環境省自然環境局自然環境計画課の奥田青州地域ネイチャーポジティブ推進室長が講演。絶滅危惧種であっても生息環境を保全することで速やかに個体数が回復する種に限り調査研究や環境教育での捕獲を可能とする「特定第二種国内希少野生動物種制度」を紹介し、対象となる種の選定には石井氏の多大な貢献があったと述べた。

続いて、大阪公立大学大学院農学研究科の平井規央教授が「昆虫学者から見た里山」石井実先生に学んだことをテーマに話題提供を行った。石井氏が取り組んだ蝶類の研究の一例として、イチモンジセセリが長距離移動を行う仮説の検証を目的としたマーク

ング調査や、ギフチョウが成虫になるまでに2回の休眠を経ることを明らかにした生態調査を紹介した。

セミナーでの販売手法を実践

受講農家がなんば駅でマルシェ

3月9日、農業ビジネススクール「トップ経営販売戦略強化セミナー」の受講生らによる「大阪産(もん)マルシェ」南海なんば駅が開かれた。

同セミナーは、大阪農業をけん引する主力農業者の育成を目的として、大阪府とJAGグループ大阪が令和7年度に共同で実施。先進農家や現役のバイヤー、小売業者などを講師とする全7回の研修で、受講生らは消費者

最後に、同研究所の取り組み紹介として中嶋昌紀理事と職員3名が登場。石井氏の理念「地域社会に開かれた知と技術の

ニーズの把握や販売戦略の立案等について学んだ。消費者へ直接販売する実践の場として実施したマルシェでは、イチゴ、たまねぎ、ほうれんそうなど受講生自ら生産した農産物を持ち寄り、対面による消費者の反応を踏まえ各々が工夫しながら販売し、好評を博した。

数値によるブランド化など 実践へ

羽曳野市・吉川幸一郎さん

マルシェに参加した羽曳野市の吉川幸一郎さんは、イチジクを中心に多品目を栽培。この日はジャムやネギ、ソラマメ菜などを直売し、地元マルシェとは違い、改札前を早足で行き交う客層に対し第一印象で伝

える工夫について試行錯誤した。セミナーでは、先進農家による成分分析を根拠とした数値に基づくブランド化や、百貨店バイヤーによる青果売場での配置・見せ方の重要性に関する研修が特に印象に残ったという。今後は、「自身の農産物の強みを



人通りの多い難波駅改札前のブースに多くの客が訪れた



自身も直売所や通販に取り組む吉川さん。「今後の販売に活かしたい」と話す

しっかり分析し、データとともに発信したい」と意気込む。(沼田)

「信頼」拠点をめざす」を受け継ぎ、地域と連携した取り組みを今後も発展させていく方針を報告した。(林佐)